

39. そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。
40. そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。
41. エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。
42. そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。
43. 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。
44. ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。
45. 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」
46. マリヤは言った。
- 「わがたましいは主をあがめ、
47. わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。
48. 主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。
- ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。
49. 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。
- その御名は聖く、
50. そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。
51. 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、
52. 権力ある者を王位から引き降ろされます。
- 低い者を高く引き上げ、
53. 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。
54. 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。
55. 私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」
56. マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った。

説教

これはイエスさまの母となるマリヤの讃歌です。「マリヤの讃歌」は冒頭の「あがめ」のラテン語「マニフィカート」の名で世界中で知られています。

天使ガブリエルのお告げでイエスさまを身ごもることを知らされたマリヤは、既にヨハネを身ごもって六ヶ月となる親戚エリサベツの家を訪れ、そこで三ヶ月過ごします。マリヤを迎えるエリサベツは聖霊に満たされ、「わが主の母が来た」とおなかの子と共に大喜びして歓迎します。このエリサベツの祝福のことばに応答して歌ったのが「マリヤの讃歌」でした。

エリサベツはマリヤのことを「わが主の母」と呼び、「あなたは女の中の祝福された方」と賛辞を贈ります。そして、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」と、マリヤの信仰を絶賛するのです。この時、マリヤをこれほど褒めてくれる人など他にはいませんでした。なぜなら、マリヤはイエスさまを身ごもってはいたものの、それは許嫁ヨセフの子ではなかったからです。

天使ガブリエルのお告げの通り、それは聖霊によって身ごもった「神の子」でありましたが、その事実を地上で知るのはヨセフとエリサベツ夫婦だけです。許嫁によらず妊娠したとなれば、世間の冷たい視線を浴びるどころか、当時は石打ちの死刑となるどころでした。自分が身ごもった子どもが「神の子」イエスさまであることは、ただ天使ガブリエルのお告げと、それを信じる信仰による以外には確信することができないのですが、それをマリヤは「信じきった」のでした。ただただこれは信仰のなせるわざです。そして、それが何より最も「幸い」だということで、「何と幸いなことでしょう」と絶賛したのです。

このエリサベツのことばに励まされたマリヤは、「マリヤの讃歌」を歌いました。「わがたましいは主をあがめ、わが霊はわが救い主なる神を喜びたたえます。」(46-47)「喜びたたえる」という言葉は、踊り上がるほどの喜びを描写する表現です。「あがめる(マガル-)」という言葉の本来の意味は「大きくする」です。そこから「重んじる」「讃美する」の意味ともなります。取るに足りない小さく軽視して無視するのではなく、主を大きな存在とします。しかも桁外れにメガトン級の巨大さです。「わがたましい」「わが霊」とあるように、自分にとって巨大な存在となった神をマリヤは全身全霊で喜んでいて、最大限の表現で告白します。

どうしてこんなにも喜ぶのでしょうか。何がマリヤの喜びの核心にあるのでしょうか。それは次の告白に込められています。「主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。」(48)この時、マリヤは推定弱冠12歳です。しかも、首都エルサレムから遠く離れたガリラヤの貧しい田舎町ナザレの娘です。「この卑しいはしのために」の直訳は「彼の(最下層の)女奴隷の卑しさ(零落、恥、屈辱、低い身分)」です。「目を留める」とは「じっと見る、心配する、ひいきする」という意味の言葉です。自分はこの世で最も惨めな落ちぶれた者なのです。それなのに神は無視することなく、心配して、じいっと見ていてくださった、というマリヤの驚きと喜びが爆発しています。

この「最下層の女奴隷の悲惨さ」というのは決してオーバーな表現ではありません。マリヤの家系はレビ族でしたが、彼女の住むガリラヤ地方は「異邦人のガリラヤ」と呼ばれ、その町の一つナザレは「ナザレから何の良いものが出ようか」とバカにされました。行って見て驚きましたが、近年まで一般の人々は穴を掘って生活していたようです。それで、マリヤの家と言われる所も洞穴の中にあり、近所の許嫁ヨセフの家もまた穴の中で驚きました。勿論その場所が本当にマリヤやヨセフの家だったとは限りませんが、少なくとも当時のナザレの住民は洞穴で生活していたのは間違いありません。マリヤの告白した「最下層の女奴隷の落ちぶれた姿」とは何ともリアルな表現なのです。そして、そんな自分の悲惨さにも神は目を留めてくださっていた、自分みたいな者を神は見捨てることなくずっと見ていてくださった、この喜びはどれほど大きなものであったことでしょうか。

あまりに嬉しいマリヤはこう告白します。「ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。」(48)誰も未来のことなど知る由もありません。12歳の少女が一体どれほど歴史を見通すことができたのでしょうか。それなのに「これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう」とマリヤは告白します。「これからどんな時代が来ても」、時代を超えて世界中の人々が自分を幸せ者と思うだろう、と言うのです。「しあわせ者と思う」とは「この上なく最高に幸せ者と思う」という最上級の表現で、自分の幸せさは時代を超えて最高なのだを告白するのです。マリヤの喜びが時間と空間を越えて、それほど大きかったとも言えますが、のみならず、「主の母となる」祝福の絶大さが単純に時間と空間を越えることを知っていたマリヤの冷静な信仰の賢さがそこにあったと読み取ることができます。

自分が最も幸いな者であること理由を「(なぜなら)力ある方が、私に大きなことをしてくださいました(から)」とマリヤは解説します(49)。「大きなこと(マス)」という言葉は、冒頭の「あがめ(マガル-)」の類語です。「全能の神がメガトン級に巨大なみわざを私にしてくださいだったので、私にとって神はメガトン

級に巨大な存在となっていて最高に幸せだ」とのマリヤの素朴な信仰告白です。

やはり神はこの地上に住む人間とは全く別次元にいます聖なるお方で、「その御名は聖い」のです(49)。神はいと高き天におられます。地上の人間の誰の影響も受けず、誰からの指図を受けることもなく、ただおひとり、一方的に、この人と思う者に「あわれみ」を施されるのです。この「あわれみ」は、人の願いや努力、民族、貴賤によらず、ただ神が憐れもうと特別に選んだその人に与えられます。「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。」(50)「主を恐れかしこむ」とは「神により頼んで生きる神の民」の旧約的表現です。これまでマリヤは、「この卑しいはしため」(48)、さらには「私」(49)が神の恵みを受けたと表現していましたが、ここに至って「代々にわたる」「主を恐れかしこむ者」と一般化します。

マリヤを含めて彼らに神が与えられる「大きなこと」(49)、「あわれみ」(50)とはどのようなものが具体的に記されます。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。」(51-53)ローマの皇帝、ユダヤの王といった「権力ある者」「富む者」、さらには「心の思いの高ぶっている者」を、神は「追い散らし」、「王位から引き降ろされます」。そして「低い者(気落ちした者、貧しい者、落ちぶれた者、謙る者の意)」を「高く引き上げ」、「飢えた者を良いもので満ち足らせ」ます。これが神の「あわれみ」「大きなみわざ」だとマリヤは告白するのです。

ただ、マリヤはここで涼しく一般史を論じているわけではないと思います。12歳の娘にそんなたいそうな学問や知識があったとは思われません。ローマの皇帝はユダヤを支配し、そのユダヤを支配する王ヘロデはあちこちに巨大な建造物を造っていて、許嫁のヨセフはおそらくそのために駆り出されていました。マリヤはこう歌いましたが、見た目の現実はこれと反対です。ですから、マリヤは見た目でただ一般史を論じているのではなく、自分が神に特別に選ばれて「主の母となった」という事実から一般史を解き明かしているのです。自分は何もない貧しく落ちぶれた者だが、神がその全能の御腕を働かせて「高く引き上げ」くださったことで、世の金持ちや権力者を出し抜いて「主の母」となりました。そして、神がこんな私を「主の母」として特別に選んでくださったという「あわれみ」の事実が、マリヤに世界史を達観させました。私は神のあわれみを受けた、私は神に愛されている、神に特別に選ばれた、世の罪人に救いをもたらす神の「あわれみ」のわざはここにある、そしてここから始まるのだ、という極めて大胆な確信です。

最後に、この「あわれみ」は、神の気まぐれによるものではなく、その昔神が約束された「アブラハムとその子孫」への約束の成就だというイスラエルの契約の源流というか、本流に辿り着きます(54-55)。神はアブラハムとその子孫に「地上のすべての民族はあなたによって祝福される」と約束なさいました。この約束は、最終的にはイエスさまによって成就し、完成します。罪に滅び行く世から特別に救いへと選び出したアブラハムの子孫であるイエスと、その子たちによって、神は世の罪人を救うのです。

私たちがまた卑しく貧しく低い者です。でも、どんなに貧しく卑しくても、神は見捨てることなく、顧みて、イエスさまを与えてくださいました。神に愛されている、イエスさまが共におられる、この喜びは大きいものです。